



日本語の連体修飾構造からみた際立ちの社会性 : 社会的要因を取り入れた認知言語学のアプローチ

小松原, 哲太

(Citation)

社会言語科学会大会発表論文集, 41:72-75

(Issue Date)

2018-03-10

(Resource Type)

conference paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008842>



日本語の連体修飾構造からみた際立ちの社会性

一社会的要因を取り入れた認知言語学のアプローチ

小松原哲太(立命館大学)

1. はじめに

本研究では、認知言語学の観点から、ミクロな文法構造の記述と一般化には、社会的要因を取り入れる必要があることを論じる。具体的には、日本語の修飾構造の適切性を動機づけるものは何かという問題設定の下で、この動機づけに社会認知的な要因が関与していることを論じる。

2節では、本研究で考察する現象と調査の着眼点を説明する。3節では、調査方法と結果を示す。4節では、得られた結果にもとづいて、理論的考察を行う。

2. 修飾構造における語順

2.1. 修飾構造と認知的な際立ち

考察対象とするのは、例えば「私の手」「大木の枝」「マラリアの熱」「結婚のあいさつ」などのような、日本語の名詞修飾構造「XのY」である。この構造をもつ表現の意味は非常に多様であり、例えば島津他(1986)は自然言語処理の観点から、「XのY」を意味関係にもとづく86のタイプに分類している。

「XのY」が表す意味関係は多種多様であり、共通性を見いだすのは不可能にみえる。しかし、認知的な捉え方という点では、「XのY」には共通するパターンが存在する。認知言語学では、修飾構造における名詞の語順には、際立ちの順序が反映されると考えられている(Langacker 1993)。典型的には、修飾部Xに生起する名詞は、他の存在にアクセスするための参照点(reference-point)になるような際立ちの高い存在を表す。被修飾部Yに生起する名詞が、この参照点からアクセスできるターゲット(target)を表す場合に、「XのY」の適切性は高くなる。

- (1) a. 大木の枝 / ?枝の大木
- b. 女学生の靴 / ?靴の女学生

(1a)では「大木の枝」の語順が適切であり、これを反転させた「?枝の大木」の語順は不自然である。枝と木は部分と全体の関係にあるという点に注目すると、適切性が高くなるのは、全体を表す「大木」が部分を表す「枝」に先行する場合だけであることが分かる。物の知覚にお

いて、物の全体は部分にアクセスするための参照点として機能するのに対して、物の部分は全体にアクセスするための参照点としては機能しない。(1a)の非対称性は、この認知的な関係の非対称性を反映している。

Langacker(1993)は、この相対的な際立ちの非対称的關係について、(3)の原則を挙げている。(1a)は原則[II]を、(1b)は原則[I]の非対称性を反映している。

- (3) 他の条件が同じであれば、相対的な際立ちに関する種々の原則が一般的に成り立つ。例えば [I]人>人以外, [II]全体>部分, [III]具体>抽象, [IV]可視>不可視, 等である(Langacker 1993: 30; [I]-[IV]の番号は発表者による)。

2.2. 際立ちに関与する諸要因

(1)の適切性のちがいは、主に知覚のしやすさの非対称性を反映している。知覚の傾向は、ある存在の際立ちを決める要因の1つである。しかし、「XのY」の多様な用例を観察すると、知覚以外にも、際立ちに関与する要因がある可能性がみえてくる。例えば(2a)では病気と症状の関係が、(2b)では結婚とあいさつの関係が問題になる。ここには、知覚以外の要因が関与しているようにみえる。

- (2) a. マラリアの熱 / ?熱のマラリア
- b. 結婚のあいさつ / ?あいさつの結婚

これまでの認知言語学の研究では、どのような際立ちの要因が、修飾構造の適切性に関与しているかという点に関して、体系的な考察はなされていない。本研究では、修飾部「X」に生起する名詞のタイプを調べることで、修飾構造の適切性を動機づける際立ちに、どのような要因が関与しているかを調査する。

調査を行うための素朴な研究手法としては、以下のものが考えられる。

<素朴な方法>

1. 「XのY」の用例を集める。
2. 「X」を意味で分類する。

しかし、際立ちは相対的である。例えば、「大木の枝」では枝は部分に相当するが、「枝の先」では枝は全体に相当する。修飾部「X」に生起する「大木」「枝」のような語を意味で分類するだけでは、ここに全体性という要因が関与していることは分からない。したがって、上記の素朴な方法では、際立ちにどのような要因が関与しているかを調べることはできない。

2.3. 語順の反転

そこで本研究では、(2)のような、語順の反転現象を利用する。(2a)の「新品」と「ペットボトル」は、どちらも同じペットボトルの全体を表すので、知覚的な際立ちは均衡していると言える。同様のことは(2b)についても言える。(2)の対称性は、この種の際立ちの対称性を反映している。

- (2) a. 新品のペットボトル / ペットボトルの新品
- b. 地鶏の炭火焼き / 炭火焼きの地鶏
- (3) 富山の薬 / 薬の富山

反転現象は、際立ちに関与する要因を調べるための具体的な手がかりになる。(3)の「富山」は土地を表し、「薬」は土地の名産品を表している。「富山の薬」「富山の温泉」「富山の市長」のように、都市は空間的にも社会的にも際立ちが高く、関連する事物へのアクセスポイントになる。この中で、(3)のような反転ができるのは「薬」だけであるが、(3)にも際立ちの均衡が反映されているとすると、(3)は、薬が富山と同じくらい際立ちが高いことを示している。際立ちには、知覚の要因だけでなく、地域の名産品のような文化的、ないしは社会的な知識が関与していることが、(3)から示唆される。

際立ちが均衡していると、修飾部「X」と被修飾部「Y」の名詞は反転できる(小松原 2013, 2016: 190-197)。言い換えると、修飾構造が反転できることは、「X」が表す存在と「Y」が表す存在の際立ちが同程度に高いことを示す言語的な指標になる。「X」と「Y」が反転可能であるということからは、一方が他方と同等の際立ちをもっていることが推測できる。本研究ではこの現象を利用して、際立ちに関与する要因を調査する。

3. 都市への参照点

3.1. 調査方法

本研究では、際だった参照点になる都市名に注目し、以下のような方法を用いて、際立ちの要因を調査した。

<修飾構造の反転を利用した方法>

1. 際立ちの高い存在を表す「Y」について、「XのY」の用例を集める。

2. 「YのX」に反転できるものを調べる。
3. 「X」を意味で分類する。

「Y」の際立ちが分かっているならば、反転を利用することで、「X」の際立ちが推測できる。本研究では、よく知られた都市名が「Y」の位置にくる表現を考察対象とした。日本語ウェブコーパス jpTenTen12 と検索ツール Sketch Engine を用いて、「XのY」において「Y」が日本の主要都市「東京」「横浜」「大阪」「名古屋」「神戸」「京都」を表す用例を収集した。これらの用例が「YのX」に反転できる場合、Xがどのような意味特徴をもつかを調べた。例えば「京都」の場合、以下のような方法で調査を行った。

1. 文頭かつ助詞が続く「Xの京都」を検索し、1,000例をランダム抽出して、「X」の頻度順に並べる。(「京都駅」などの複合語が含まれるのを避けるため、文頭かつ助詞が続くものに限った。)
2. 2例以上見つかった表現の中で、反転可能なものを選ぶ。(例)「夏の京都」「当時の京都」「幕末の京都」など。反転可能性の基準として、反転した「京都のX」でコーパスを検索して、10例以上が見つかった場合に反転できると判断する。
3. 反転可能なものについて、「X」を意味で分類する。(例) [季節] [気候] [場所] [人] [文化] など。

3.2. 都市への一般的な参照点

表1 2都市以上に観察された表現

意味タイプ	反転可能な表現
[現在]	「今」[6-23]/「現在」[6-11]/「現代」[2-2]/
[過去]	「当時」[6-12]/「昔」[5-5]/「戦後」[3-2]/
[未来]	「戦前」[3-4]/「近世」[2-2]/「今後」[2-2]
[日][週]	「今朝」[3-16]/「朝」[3-3]/「夜」[5-5]/
[年]	「今日」[5-136]/「明日」[6-11]/「初日」[2-4]/「週末」[4-3]/「今年」[3-21]
[季節]	「夏」[4-28]/「冬」[4-24]/「春」[3-7]/「秋」[2-20]
[気候]	「雨」[4-6]
[天候]	
[場所]	「故郷」[2-6]/「地元」[4-4]/「隣り」[2-2]
[人]	「私」[3-8]/「知り合い」[2-2]
[その他]	「全て」[6-27]/「次」[4-7]/「他」[4-3]/「実際」[2-2]

表1は、「東京」「横浜」「大阪」「名古屋」「神戸」「京都」のうち、2つ以上の都市名で確認された、「XのCITY」から「CITYのY」への反転が可能な表現を示している。各表現に付された[A-B]の形式で示す数値のうち、Aは観察された都市名の数を示し、Bは「XのCITY」の生起頻度

を都市間で比較した最高生起頻度を示す。例えば「夏」[4-28]であれば、「夏の CITY」というタイプの表現が 4 つの都市名 (e. g. 「東京」「大阪」「名古屋」「京都」) について確認され、その 4 パターンのうち最も多かったもの (e. g. 「夏の京都」) で 28 例が見つかったことを示す。

最も生産的なパターンは、「当時」のような時代、「朝」のような時間帯、「夏」のような季節など、時間的な存在が参照点になるタイプである。空間的な存在である都市について述べるために、時間的なセッティングを認知的な参照点にするのはきわめて自然である。その中でも「今」「今後」「今朝」「今日」「今年」のような、発話時との相対的な時間位置を表す表現は、都市を問わず観察された。この事実は、発話状況を、さまざまな事物にアクセスするための基本的な参照点として用いるという、一般的な認知的方略を示唆している。

3.3. 特定の都市への参照点

表 2 は、「東京」「横浜」「大阪」「名古屋」「神戸」「京都」の中で、1 つの都市名とだけ反転することができる表現を示している。ここでは、意味的に多様な分布を示した「京都」と「神戸」についての調査結果をまとめている。角括弧内の数値は、「X の CITY」の生起頻度を示す。

まず、「神戸」については、(4) のような、文化の要因が関与する表現が興味深い。(4a) のような反転が可能になる背景には、洋食のレストランやイルミネーションなど、クリスマスと結びつく文化が神戸に根づいているという知識が関与している。(4b) は、(4a) と同様に、神戸の文化的特色が、反転可能性に関わっている。さらに (4c) では、神戸・京都・大阪を比較する上で、洋菓子が神戸の際だった特色であるということによって、「洋菓子の神戸」という表現の適切性が支えられている¹。

- (4) a. 神戸のクリスマス / クリスマスの神戸
- b. 神戸の菓子 / 菓子の神戸
- c. (…) 和菓子の京都、洋菓子の神戸といわれる中、自分の生誕の地、大阪で人々に喜ばれ愛される菓子創りをする事を決意しました。(「GOKAN (五感)」『高島屋オンラインストア』)

次に「京都」については、(5) のような表現がみられた。(5a) の「幕末の京都」に関して、幕末という時代が、京都の時間的な参照点となる背景には、歴史的な知識が関与している。(5b) には、京都が際だった地理的特性をもつという知識が関わっている。

- (5) a. 京都の幕末 / 幕末の京都
- b. 京都の盆地 / 盆地の京都
- c. 京都の真夏 / 真夏の京都

また、季節や気候に関連する表現は、「京都」について特に多様である。表 1 が示すように、春夏秋冬は一般に都市への参照点になりやすいが、この 4 つの季節全てが観察されたのは「京都」のみである。(5c) の「真夏」のように、特定の季節について詳しく述べる表現が観察されたことも、「京都」の特徴である。この特徴には、京都では季節の移り変わりが問題にされやすいという風土的な特質が反映されていると考えられる。

表 2 特定の都市のみに観察された表現

意味タイプ	「神戸」のみ 反転可能な表現	「京都」のみ 反転可能な表現
[現在] [過去]		「今頃」[3]/「今期」 [10]/「幕末」[5]
[日][週] [年]	「連休」[2]	「日曜」[2]/「休日」 [2]
[季節] [時節]	「クリスマス」[2]	「真夏」[3]/「晩秋」 [2]/「年の瀬」[2]
[気候] [天候]	「秋晴れ」[2]	「雪」[2]/「猛暑」[2]
[場所]	「郷里」[2]/「近所」 [2]/「西」[2]/「港 町」[2]	「盆地」[4]
[自然]		「桜」[2]/「紅葉」[4]
[文化]	「舞台」[2]	「伝統」[2]
[食べ物]	「菓子」[2]	

以上の考察から分かるように、特定の都市のみに観察される反転可能表現は、生起頻度こそ高くないものの、修飾構造の適切性に、風土や文化の具体的な知識が関与していることを示すという点で重要である。

3.4. 際立ちの次元

日本語の都市名を含む連体修飾表現に関する本研究の調査を踏まえ、認知的な「際立ち」という概念には、少なくとも (6) のような要因が関与すると考えられる。コロン以下は、その要因が修飾構造の適切性に関わると考えられる表現の例を示している。

- (6) a. 知覚的要因：「大木の枝」
- b. 時間的要因：「今朝の東京」
- c. 地理的要因：「盆地の京都」
- d. 天候・気候的要因：「雨の横浜」
- e. 文化・社会的要因：「洋菓子の神戸」

¹ 引用例の出典が明示されている用例は、3.1 節で述べた調査の対象以外から収集されたものである。具体的な出典については、論文末尾の「引用例出典」を参照。

4. 際立ちの社会性

(6)に示すように、本研究の調査結果は、文化・社会的な知識が、修飾構造の適切性を決める際立ちに関与していることを示唆している。(7)では「伝統」や「文化」が修飾部となっており、このことがより直接的に示されている。(7a)の修飾構造の適切性は、京都が日本の文化的伝統を担ってきた都市の代表格であるという知識によって支えられていると解釈できる。(7b)の「文化の京都」という表現は、東海道に位置する都市の中で、京都が際立った文化的特色をもつことを浮き彫りにしている。

- (7) a. 京都の伝統 / 伝統の京都
b. (…)東海道の美しい歴史は、文化の京都から、
野蠻の関東へと、廃れて行く筋道となつて開
展される、王朝時代のデカダン詩人、業平の東
下りは、哀れにも華やかな序幕を明けた (…)
(小島鳥水「天龍川」：257)

ある参照点を経由してターゲットを概念化するということは、参照点となる存在の観点からターゲットを認識するということである。(7b)における「野蠻の関東」と「文化の京都」の対比には、関東と京都の対照性を、野蠻と文化の対照性として認識するプロセスが反映されている。(8)の「友禪の京都」という表現は、特定の芸術性の観点から都市を認識するプロセスを反映している。

- (8) 光琳にあらわれた元禄時代。あるいは友禪の京都、
懷月堂の江戸。(…)淡泊とか清楚とかいう面影は、
少くとも、これらのものには見られない。(津田左右
吉「偶言」：47)
(9) a. ?伝統の東京
b. ?友禪の大阪

一見すると、(8)の「友禪の京都」のような表現は、極度にコンテキストに依存したその場限りの表現であり、「XのY」という修飾構造の一般化に際しては、例外として位置づけられるようにみえる。しかし、談話の進行に合わせて話題が特定化されるにつれて、際立つ存在がより具体的になってくるのは自然である。

ある存在の際立ちは、あくまで比較される存在との相対的な関係によって規定される。「当時の京都」「夏の京都」「伝統の京都」「友禪の京都」のような一連の表現は、規則的か例外的かという二分法によってではなく、際立ちの具体性のスケール上に連続的に位置づけられる。「当時」や「夏」は、都市を問わず際だった参照点になりやすいのに対して、(9)に示されるように、「伝統」や「友禪」は、特定の都市との関係でのみ際立った参照点にな

り得る。具体性の高い性質が参照点になる修飾構造の適切性は、文化・社会的な要因によって大きく左右されると言える。

5. おわりに

「XのY」という連体修飾構造において、修飾部「X」に生起する語の分布を記述するためには、「X」が表す存在の際立ちを分析する必要がある。この際立ちには、(6)のような多面的な要因が関与している。

近年の認知言語学では、社会と談話の要因を取り入れる必要性が論じられている(Schmid 2016)が、具体的な分析や分析手法の理論化は本格的にはなされていない。認知言語学では、空間や知覚の表現など、身体経験の観点から説明しやすい言語現象に注目する傾向がある。しかし、簡単には説明できない現象であっても、それを排除しないということが、理論的な健全さを保つためには必要である。本研究の考察は、基本的な文法構造の使用が社会的要因によって制約されていることを示しており、この点で、認知言語学のアプローチに社会的な要因を取り入れる必要があることを例証している。

謝辞 本研究はJSPS科研費(17K13451)の助成を受けたものである。

引用例出典

- 小島鳥水「天龍川」(戸川明三(編)(1929). 現代日本文学全集第三十六篇—紀行随筆集—改造社 pp. 256-265.)
津田左右吉「偶言」(今井修(編)(2006). 津田左右吉歴史論集 岩波書店 pp. 45-55.)
渡邊登「GOKAN (五感)」『高島屋オンラインストア』
<http://www.takashimaya.co.jp/shopping/food/gokan/> (2017年12月26日)

参考文献

- 小松原哲太 (2013). 日本語における連体修飾関係の反転現象 日本語文法, 13(2), 37-53.
小松原哲太 (2016). レトリックと意味の創造性—言葉の逸脱と認知言語学— 京都大学学術出版会
Langacker, Ronald W. (1993). Reference-point Constructions *Cognitive Linguistics*, 4(1), 1-38.
Schmid, Hans-Jörg (2016) Why Cognitive Linguistics Must Embrace the Social and Pragmatic Dimensions of Language and How It Could Do So More Seriously *Cognitive Linguistics*, 27(4), 543-557.
島津明・内藤昭三・野村浩郷 (1986). 助詞「の」が結ぶ名詞の意味関係の解析 計量国語学, 15(7), 247-266.